寄稿

大地10年の歩み

広報委員幹事　村上信弘

今机の上に厚さ80mmの大地がある。創刊号より第28号までである。この厚さの中に、大地の歴史がある。大地の創刊号は平成元年12月20日であり、この大地29号で10年目を向える。10年一昔、いや10年二昔とよく言われるが、この歴史の中に、大地の編集に携われた諸先輩方の姿が凝縮されていると思うと、編集に対する真摯な姿にただ敬意を表するばかりである。

大地の創刊より10年目を迎えるにあたり、大地が今まで以上に多くの会員に愛読いただくためには、より読者の立場に立った充実した内容に編集していく必要があると考え、平成９年12月に「大地の編集に関するアンケート調査」を実施しました。アンケート結果、大地は多くの会員に、しかも新入社員から管理職まで幅広く愛読いただいていることが判明した。管理職の方々は大地の創刊号をご存じでしょうが、新入社員の方々は当然創刊号を知らないわけである。大地の編集の方向として、大地を気軽に読んでいただくために、若い年代層と営業、経理、総務に携わる方々に是非原稿を寄稿していただきたいと考えております。

大地が10年目を迎える今年、広報委員会では「大地10年の歩み」と題して大地の歴史を会員皆様に紹介することになりました。大地の歴史を紹介するにあたり、１．大地誕生の由来、２．大地の目次内容、３．大地の編集に携われた人々、４．おわりに、の内容で進めたいと思います。

１．大地誕生の由来

１）大地誕生

平成元年は、東北地質調査業協会が昭和34年１月に設立されて以来30年目にあたる年であった。当協会では、協会が発足して30年が経過したこの節目を記念して、創立30周年記念式典を同年10月に仙台で開催した。この記念行事の一環として協会では、記念誌「大地に未来を探る」を発行した。

従来、協会の機関誌としては、総務委員会の協会ニュースと技術委員会の技術ニュースを発行していた。当協会は創立30周年を迎えたことを機会に、協会ニュースと技術ニュースを合併し総務委員会第三部会が新しい協会誌を担当することになった。協会誌の名前は、記念誌「大地に未来を探る」の巻頭題である「大地」が、地質調査に従事する人々にとって的を得た表現であるとのことから大地が採用された。以来、10年にわたしこの大地を継承してきた。

２）大地の揮毫

大地の表紙に毛筆で画かれた「大地」は、大地を手にするとき写真とともに強烈に目に入ってくる。横文字・ひらがなに慣れ、しかもゴシック体が氾濫している時代に、楷書で画かれたこの二文字は見る人々にとって安らぎを与えるといってもいいのではないでしょうか。大地の書画は、長谷弘太郎前理事長によるものです。

２．大地の目次内容

１）表紙

創刊号より第28号まで、一貫して写真で構成されている。

創刊号より第８号までは、渓流・名峰・湖・海の風景であり、題材が多岐にわたっている。第９号から第12号の１年間は、許成基氏、阿部久九兵衛氏の提供による偏光顕微鏡写真である。

ケンタレナイト・ホルンフェルス・カンラン岩が題材であり、造岩鉱物の美しさをアピールした一年である。第12号より第17号は、建設省東北地方建設局の各事業所および本田忠明氏により提供された完成したダムおよび道路の紹介である。地質業を生業とする会員にとって、この写真は現場を彷彿させる企画である。第18号より第26号は航空写真を用い、１年ずつ題材を変えている。名峰・海岸線・湖とテーマを設定し、季節にあった写真を掲載している。

2）特別寄稿

地質調査業の仕事と密着した「官」・「学」・「産」の各機関より寄稿を受け、第３号より開始されている。「官」からは、建設省東北地方建設局・東北農政局・日本鉄道建設公団・日本道路公団仙台支社、道路保全技術センター、「学」として東北工業大学・東北大学・八戸工業大学・日本大学・弘前大学・岩手大学・山形大学、「産」からは東北電力、ＪＲ東日本コンサルタンツ・東北開発コンサルタントである。

題材として、地質調査業に期待する、海外との技術協力、自然変革と環境保全、地震災害、変化・改革と戦争の時代、学生の動向と就職戦線、自然とのつきあい…等などテーマは多岐に富んでいる。10年間に寄稿いただいた内容は現在クローズアップされているテーマでもあり、再読するに値する内容と言える。

3）技術報告

編集に携わる担当者が原稿を集めるのに、苦労したコーナーである。工期に追われる最中、技術報告の原稿の依頼を受けた人々の苦労を思うと、原稿が到着したときの担当者は思わず原稿に手をあわせたものである。この紙面を借用して、原稿を提供された人々にあらためて感謝の意を表します。第19号からは、毎年開催される技術フォーラムから題材を選択し寄稿していただくようになり、今後も続ける方針です。

4）講　座

第17号より掲載した項目であり、地域防災計画のための調査（今村遼平氏・足立勝治氏）、地震と私たち（増田徹氏）、地盤環境汚染の調査方法（高橋忍氏）が原稿を提供された。とりわけ、地域防災計画のための調査は、ページ数にして延べ100ページ分、期間にして３年にもわたっている。第17号が刊行された平成７年は、１月に阪神・淡路大地震が発生した年である。この２年前から、釧路沖地震・北海道南西沖地震・北海道東方沖地震・三陸はるか沖地震と地震が多発していたのである。題材としてタイムリーであり、これと並行して地震と私たちの講座が開講したのである。

5）寄　稿

数多くの人々（90名）より、寄稿いただいたコーナーである。技術論文・随筆・開催報告と文筆携帯は様々であり、１回の掲載で終了するのが寄稿の通例であったが、シリーズで掲載された寄稿も数多い。シリーズとしては、ハンマー10話（吉川謙造氏）、土木地質学の夢（阿部正宏氏）、切手と地質（藤島泰隆氏）があげられる。

ハンマー10話は技術ニュースの時代より掲載されたシリーズで、ハンマーをとおして関わりのあたった人と自然との出会いを軽妙に描きながら、人と自然との出会いの素晴らしさ、さらに地球環境破壊の問題を取り上げている。

土木地質学の夢は、土木地質学が純地質学と土木工学との境界領域にあるという見解から、地質学の生いたち・土木地質学とは・基礎地盤について・水の作用・粘土科学・岩盤への化学的アプローチ・土木地質学の歩みの項目で号を重ねた。最後に、「現在土木地質学に求められていることを一口で言ってみれば、現場での現象の観察や測定された値が、多くの実験や今までの資料とのかみ合わせによって、野外での断片的なデータをとりまとめ妥当な客観的な結論と判断を掲示し、将来の土木工学的技術水準を高めてゆくこと」で締めくくっている。土木地質学の教科書と言っても過言でないシリーズで

ある。

切手と地質は、第12号より７回シリーズで掲載された。巻頭で「世界各国で郵便に使用されている目的で発行された切手は、すでに30万種を優に越えているが、これらの中から描かれている図案あるいは発行目的が地質に関係するものを中心に多少収集しているので、特定のテーマあるいは図案をもとに既発行分が完全収集できているものを中心に紹介する。」と述べ、217の切手を解説付きで寄稿された。地質に関係する切手の決定版と言え、地質関係の人々にとどまらず切手愛好家にも価値のあるシリーズである。

このほかにシリーズとして、地質と文明、心の托鉢、釣りバカ日記、ボーリングマンの昔話、カナダの思い出、砂塵とエジプト文明、つばきのこと、トルコ寄稿等など…数多くの趣味に関するテーマが寄せられている。

第24号より、女性技術者シリーズが始まっている。平成８年に仙台で開催された技術フォーラムで、女性技術者が描く将来像（夢）のパネルディスカッションが大変盛況裡であったことからこのシリーズが企画され、今後も続けていく方針です。

6）人物往来

創刊号より掲載されたコーナーであり、会員各社のオーナーや支社長・支店長に、会社創設の理念、生活信条、趣味などを掲載していただく企画である。会社ではわからない生活信条や趣味などその人となりをかいま見ることができ、親しみのあるコーナーでもある。

7）訪問シリーズ

地域に根ざした博物館・科学館・記念館・標本館などを紹介するコーナーで、第18号より始まり10箇所を掲載している。地質に関係する分野にとどまらず、自然科学に関係する展示館をこれからも掲載していく方針です。

8）地学の教室シリーズ

理科離れ・地質離れと言われている今日、地質調査業あるいは建設コンサルタントの業界を学生そして教育者はどのような視点で見ているのだろうかという主旨で、第21号より掲載された。大学の学生、高校あるいは大学の先生に寄稿していただいており、学生を受け入れる側の会員各社にとっては大変興味あるコーナーと言えるのではないでしょうか。

3．大地の編集に携わった人々

1）編集責任者

大地の巻末に、編集責任者が記載されている。編集責任者は、創刊号より第５号が斉藤芳徳氏、第６号より第16号が田矢盛之氏、17号より23号が鈴木楯夫氏、24号より26号が阿部征二氏である。会社の運営に大変多忙にもかかわらず、大地の編集会議に出席いただき編集責任者として統率することはあまりにも負担の大きい仕事であると考えられる。その職責に対し、編集子としてただ頭を下げるのみである。

2）編集後記

編集責任者と同様、大地の巻末に編集後記が掲載されている。編集後記の文責者は、その号の刊行を任せられている人です。編集後記を読んでいると、大地　１０　年の歩みの中で大変多くの出来事があったことそして多くの編集子がいたことをうかがえる。編集後記における文責者のキーワードを抽出すると、次のようになる。

大地刊行への熱い思い（創刊号：総務委員会第三部会）、発注者側の協会への要望（第３号：太田保氏）、東西ドイツの統一に代表される緊張緩和（第４号：村上信弘氏）、湾岸戦争の解決（第５号：三友勝氏）、大地を揺るがす火山噴火（第６号：渡辺光氏）、暖冬の原因エルニーニョ現象（第８号：大友淳一氏）、大地10号発行の挨拶（第10号：伊藤義則氏）、オリンピックと皇太子妃決定そしてページ数による雑誌への昇格（第11号：故天間則光）、内閣総辞職による政治の混迷（第15号：鈴木隆氏）、史上ま

れにみる猛暑（第16号：谷藤隆三氏）、政治の激変と三陸はるか沖地震（第17号：長谷裕氏）、阪神・淡路大地震（第18号：佐々木孝雄氏）、豊平トンネル岩盤崩落事故と病原性大腸菌Ｏ１５７（第22号：小野寿氏）、大地片手に博物館巡り（大地23号：井戸和彦氏）

4．おわりに

大地10年の歩みは、東北地質調査業協会の発展とともに、数多くの方々に投稿していただいた内容で生まれたと言っても過言ではないと思われる。この投稿の中には、現在再読して参考となる内容が豊富に盛り込まれている。会員各社において、大地が保管されている場合には、あらためて読まれてはいかがでしょうか。

大地の編集に携われた多くの先輩各位に、敬意を表します。とくに、協会ニュースの創刊号から編集に携わり協会誌のリーダーだけでなく、地質調査業協会の牽引者として活躍されていた天間則光氏が、仕事先において平成６年３月にくも膜下出血により52歳の若さで突然この世を去りました。彼の足跡は、大地15号に掲載されています。まことに残念であり、喪心より哀悼の意を捧げます。

東北地質調査業協会は今年で40周年を迎え、秋には40周年の記念行事が開催される予定です。大地も協会のＰＲ誌として、より読者の立場に立った充実した内容で発行を続けたいと考えています。会員皆様からの多くの投稿を心待ちにして、大地10年の歩みを終わります。